



岩下 明裕

このところ、テレビや新聞で沖縄・米軍普天間基地問題の混迷をめぐるニュースを見ない日はない。そして、連日、識者や市民の誰もが鳩山由紀夫首相の

「無責任」と存在の「軽さ」を批判する。沖縄、徳之島、いや日本中の「民意」が鳩山首相に怒りをぶつけ、一刻も早く退陣してほしいと願っている。だが、鳩山首相の「不手際」や「迷走」

のみを取り上げて問題が解決するのだろうか？ 果たして別の首相が後を引き継いでうまく立ち回れば、事態は首尾良くおさまるのだろうか？

私は北海道で内外の国境地域の問題を分析することを生業としており、ニュースを見ながら、北方領土のことを思い浮かべた。内地に住む方々は驚かれるかもしれないが、両者には共通

点がある。第1に、どちらもあなたにとって人ごとだ。「根室も沖縄も大変ですな」。現地の実態を知らないばかりか、日頃（ひん）は関心さえない。第2に、どちらも第二次大戦の敗戦プロセスで「捨て石」とされ、ソ連と米国という違いはあるが、長期にわたって外国の占領を経験していることだ。

段は忘れられていても、基地問題が激化すれば、内地のメディアも注目せざるをえない。島は動かないが、基地や人は動かせる。海兵隊のケースでいえば、もともと朝鮮半島有事をにらみ岐阜と山梨にいたのであり、1956年に沖縄にやってきた。背景には砂川など反米軍基地運動の高揚がある。いわば、

基地の県外移転を掲げ勝利したこと、これまでのタブーが明らかにした。内地にとって、対岸の火事が人ごとではなくなり始めた。実は、屋良朝博著『砂上の同盟』（沖縄タイムス社）が明らかにしたように、海兵隊を戦闘地域や訓練地へ運ぶ艦船が佐世保にあるにもかかわらず、実戦

はお気の毒」自分たちの身近に基地などいらない。「善良な市民」だれもの願いだ。ではすべての市民が基地はいらない「民意」を示したらどうなるか？ もし「思いやり予算」など政府の手厚いサポートがなくなれば、米軍は、私たちが想像するより、はるかに簡単に日本から出ていくように思う。すると道は二つ。（核武装も含めた）防衛増強か、隣国との協調による「軽武装」か。前者には憲法改正を含めた高いハードルがあり、後者は理想的だが、力の信奉者たる中国や北朝鮮がその立場を変えないかぎり、「善良な市民」の平和は風前の灯火（ともしび）となりかねない。どちらもいやなら、日米安保の維持か。では沖縄によるしく。

## 「善良な市民」と普天間

### 私たちは「鳩山」を唾えるのか？

違いはある。戦後、ソ連は住民たちを放逐し島に居座ったが、米国は住民たちに基地を残すも島を返した。北の国境の争

点は、島の返還に絞られ、政府はこれを国家的な課題とするものの、地域と元島民以外の関心を持続するのが困難になりつつある。対照的に、南の国境は、日米安保の深化とともに、同盟の負担を一手に引き受けた。普

統治下で使い勝手のいい沖縄へと後から移転した。沖縄の「民意」など問われることもなく。沖縄の基地の内地移転、これは自民党政権が長年にわたって忌避してきた選択肢ではないかと私は考え始めている。90年代半ばに普天間基地移転が争点となり、ときの政府は苦勞してこれを辺野古（沖縄）に押し込めたが、民主党が総選挙の争点に

部隊が沖縄にいる理由をきちんと説明できる人は、米軍関係者も含めてほとんどいない。「鳩山バッシング」には、自らが基地を引き受けるのはまっぴら、いままでのように沖縄にいてほしいという内地の本音が透けてみえる。基地が来る可能性のある自治体は息を潜めて嵐が去るのを待っているのだろう。「うちでなくてよかった。徳之島に

私は北海道で内外の国境地域の問題を分析することを生業としており、ニュースを見ながら、北方領土のことを思い浮かべた。内地に住む方々は驚かれるかもしれないが、両者には共通

点がある。第1に、どちらもあなたにとって人ごとだ。「根室も沖縄も大変ですな」。現地の実態を知らないばかりか、日頃（ひん）は関心さえない。第2に、どちらも第二次大戦の敗戦プロセスで「捨て石」とされ、ソ連と米国という違いはあるが、長期にわたって外国の占領を経験していることだ。

段は忘れられていても、基地問題が激化すれば、内地のメディアも注目せざるをえない。島は動かないが、基地や人は動かせる。海兵隊のケースでいえば、もともと朝鮮半島有事をにらみ岐阜と山梨にいたのであり、1956年に沖縄にやってきた。背景には砂川など反米軍基地運動の高揚がある。いわば、

基地の県外移転を掲げ勝利したこと、これまでのタブーが明らかにした。内地にとって、対岸の火事が人ごとではなくなり始めた。実は、屋良朝博著『砂上の同盟』（沖縄タイムス社）が明らかにしたように、海兵隊を戦闘地域や訓練地へ運ぶ艦船が佐世保にあるにもかかわらず、実戦

点がある。第1に、どちらもあなたにとって人ごとだ。「根室も沖縄も大変ですな」。現地の実態を知らないばかりか、日頃（ひん）は関心さえない。第2に、どちらも第二次大戦の敗戦プロセスで「捨て石」とされ、ソ連と米国という違いはあるが、長期にわたって外国の占領を経験していることだ。

段は忘れられていても、基地問題が激化すれば、内地のメディアも注目せざるをえない。島は動かないが、基地や人は動かせる。海兵隊のケースでいえば、もともと朝鮮半島有事をにらみ岐阜と山梨にいたのであり、1956年に沖縄にやってきた。背景には砂川など反米軍基地運動の高揚がある。いわば、

基地の県外移転を掲げ勝利したこと、これまでのタブーが明らかにした。内地にとって、対岸の火事が人ごとではなくなり始めた。実は、屋良朝博著『砂上の同盟』（沖縄タイムス社）が明らかにしたように、海兵隊を戦闘地域や訓練地へ運ぶ艦船が佐世保にあるにもかかわらず、実戦

はお気の毒」自分たちの身近に基地などいらない。「善良な市民」だれもの願いだ。ではすべての市民が基地はいらない「民意」を示したらどうなるか？ もし「思いやり予算」など政府の手厚いサポートがなくなれば、米軍は、私たちが想像するより、はるかに簡単に日本から出ていくように思う。すると道は二つ。（核武装も含めた）防衛増強か、隣国との協調による「軽武装」か。前者には憲法改正を含めた高いハードルがあり、後者は理想的だが、力の信奉者たる中国や北朝鮮がその立場を変えないかぎり、「善良な市民」の平和は風前の灯火（ともしび）となりかねない。どちらもいやなら、日米安保の維持か。では沖縄によるしく。